

随 想

良い英文を書くために—英文校閲を行つての感想—

山 崎 道 夫*

鉄鋼協会の英文校閲をお引き受けしてから十数年経ちました。その間、常に自分に校閲など行う資格があるだろうかと思いつつも、皆様と共に少しずつ勉強させていただきどうやら役目を果たして参りました。「良い英文を書くために」などという大それたことでなく「あまりひどい英文を書かないために」という立場から、思いつくまま私の感想を記してみたいと思います。

(1) 動詞の単数形と複数形

誠におそまつと言つては大変失礼ですが、中学一年でも習う、「3人称現在単数の動詞にはsを付ける」という文法を守っていない人がかなりおります。主語と動詞が離れるとその傾向が強くなります。なぜこのような簡単なルールが守れないのか非常に不思議ですが、現実になり多い誤りです。

(2) Behavior (挙動) は複数形不可

behavior, information, evidence (証拠) は概念を示す抽象名詞ですから複数形は不可とされています。特に behavior を複数にする人が多いようです。

(3) 図などを見ながらの説明

実験結果は普通過去形で書きますが、例えば図中の曲線を読者が見ている時には現在形で書きます。

The specimens were quenched and aged. As seen in Fig. 2, the hardness decreases as the aging temperature rises.

現在形と過去形とが入り乱れて、時としてはどちらにしてよいか迷うこともあります。適当に判断して下さい。

(4) 文頭の And と But

新聞などでは文頭に And や But が多用されますが、論文ではほとんど用いられません。

(5) 短い文章を使うこと

一般に文章が長くてわかりにくい場合が多いようです。短い文章をいくつか並べて意味が通じるようくふうしましょう。日本語の場合には、文章と文章の間に、「また」、「それから」、「一方」、「しかしながら」等の「つなぎ」の言葉が多く使われますが、英語の場合、これらはなるべく用いず、単に文章を次々に書いて、これらの「つなぎ」は言外に自然にわからせるやり方がよいと思います。

(6) A, B, and C

B と and の間にコンマを入れるのが正式だそうで、鉄鋼協会ではなるべくこのようにしております。

(7) 題名の“on”について

日本の論文の題名には、「……について」とか「……に関する研究」という題名が多い。英文の論文では、On “……”とか“A study on……”とかいう表現の題名がないことはないのですがあまり多くありません。日本の方々が書かれた論文を列挙すると、On で始まるものが多く奇妙な感を与えます。On を用いて誤りではないのですが、なるべく省略して下さい。

(8) Dangling participle (懸垂分詞)

懸垂分詞とは、文の主語と文法的に結合されずに用いられた分詞であり、誤りとされています。例えば、

Sitting on the porch, a beautiful moon can be seen. 文の主語は moon で、sit しているのは人間ですから sit の意味上の主語と文の主語とが一致しておらずこれは誤用です。Considering…… などの誤用が多いようです。

Considering the relation between A and B, it was concluded that……

は誤りです。

科学技術論文では using のみが慣用されている(平野進著、「技術英文のすべて」増補版 p. 74)。

Equation (3) is derived, using the Bragg-Williams approximation.

(9) セミコロロン

セミコロロンにはすなわちという意味があり、その後には独立した文章が来ます。

The specimen was heat-treated; it was homogenized at 1000°C for 1 h and then quenched into water.

この用法は便利なが多いので覚えて置くと役立ちますが、あまりしばしば用いない方がよいでしょう。; の後に独立した文章が来ることに注意して下さい。

(10) the の用法

冠詞特に定冠詞の用法はむずかしいというのが常識です。最低限次のようなことを守つたらどうでしょうか。

a. 前に出た名詞には the をつけること。

* 金属材料技術研究所 工博

b. 普通名詞を冠詞 (a, an, the) もつけず複数にもせずに用いないこと.

c. the+複数名詞は、前に話題になつたものすべてを指すというかなり強い性格を有するので、そのつもりで注意して用いる。例えば、合金 A, B 及び C の話をして来て、the alloys と受ければ 3 合金すべてを示します。

(11) Steel A

著者が論文で扱っている鋼や合金に記号を付けることはよく行われますが、steel A とか alloy No. 2 と書くべきところ、A steel とか No. 2 alloy とかいう表現が多いので注意して下さい。なお、再度書く場合にも、the alloy A と the をつけず単に alloy A とする。また Alloy A というように大文字にしない (文頭以外)。

(12) 元素名

『鉄の元素記号は Fe で大文字で始まりますが、iron と書く場合、これは固有名詞ではありませんから、Iron と

大文字で始めない (文頭以外)。鉄の場合は誤りが少ないようですが、例えばビスマスを、何となく固有名詞と考えて、Bismuth と大文字にする場合が見受けられます。

以上、かなりささいなことも記しましたが、「よい英文を書く」ためには、とにかく恐れずに書くことが大切でしょう。何回も経験をするうちに、自然に良い英文が書けるようになるでしょう。我々は英語国民から見れば外国人であり、誤つて当然です。むしろ、「外国人が読んで全く問題のない英語を書くために、絶大な努力をする必要などない」という意見もあります。日本人が日本語を書いて他の日本人が読めば、かなり誤りがみつかれるものです。前述の、dangling participle は米英人で間違えるそうです (あるいはそれを認める傾向にある?)。とにかく最低限の文法を守つて、平易な表現で、しかもなるべく短い文章で書いて下さい。